

2. 視覚障害に関する基本的な理解と支援の手立て

(1) 視覚障害の概要

視覚障害のある幼児は、視力の低下、全体的に見える範囲が狭い、部分的に見えない、特定の色の識別ができない、明るい（又は暗い）所で見えにくいといったことのいずれか又は複数の困難さを抱えています。視覚情報の不足に伴い、例えば、絵をかきことや製作等における手先の不器用さ、動作の模倣や事物の確認の困難さ等を感じることがあります。また、つまずきやすかったりよくぶつかったりするなど、特に慣れない場所での移動の困難さ、相手の表情が分からないことからのコミュニケーションの困難さ等も感じることがあります。

(2) 視覚障害のある幼児などに見られる行動等の特徴

視覚に障害があっても普通に動いたり、おしゃべりしたりできる幼児も多いため、視覚障害があることを忘れてしまうことが、ときとしてあります。本人も、自分の見え方について周りと比較できず、見えにくいとは知らないため、自分から見えにくさを訴えることはほとんどありません。

以下は、視覚障害児や未診断であるが実は見えにくさを抱えている幼児によく見られる行動的特徴です。見えにくさの原因や状態によって行動的特徴は異なりますが、共通していることは、見えないことや見えにくいことが、情報として入らない障害や入りにくい障害となって行動に現れることです。

【視覚障害の原因・状態】

- ・視力が低いことによる見えにくさ（眼振、斜視、遠視・近視等の屈折異常等）
- ・視野が狭い、視野が部分的に欠けていて見えにくい箇所がある（同名半盲や緑内障等による視野異常、視野狭窄^{きく}、視野欠損等）
- ・特定の色の識別ができない（色覚異常等）
- ・明るさ、暗さによって見え方に影響がある（無虹彩、緑内障、白内障等による羞^{しゅう}明、明順応障害・暗順応障害等）

- ・両方の目を同じように使っていない（斜視等による片眼視等）

【行動的特徴】

- ・離れた所を見るとき、目を細めたり、顔を傾けたりする（低視力・斜視・視野異常）
- ・テレビや本に顔を近づけて見ることが多い（低視力）
- ・注意して見ようとするとき、眼球が揺れているように感じる（眼振）
- ・見ようとする物に、視線が合わない、または合いにくい（斜視・眼振）
- ・光が当たるととてもまぶしがる（羞明、明順応障害）
- ・折り紙の角同士を合わせる、小さな積み木を積む、塗り絵を線からはみ出さず塗る等の細かな作業が苦手ですぐに疲れてしまう（低視力）
- ・ダンスがなかなか覚えられないなど、運動はどちらかという苦手である。特にボール遊び等ではボールの動きについていけない様子が見られたり、長縄の動きに合わせて入っていけなかったりする（片眼視、眼球運動困難）
- ・階段の下りが苦手（片眼視）
- ・足元の色が変化する所、又は物の影が映っている所で立ち止まることがある（片眼視）
- ・人や物とよくぶつかる（片眼視・視野欠損・眼球運動困難）
- ・人混みが苦手（片眼視・視野欠損・眼球運動困難）
- ・探し物や片付けが苦手（低視力・片眼視・視野欠損・眼球運動困難・色覚異常）
- ・テレビを見たり本を読んだりするとき、顔を傾けたり横目で見たりする（斜視）
- ・目が内側や外側に寄り両目が同じ方向を見ていないように感じる（斜視）
- ・見るより、聞く方が得意そうである（視覚障害全般）
- ・色をよく間違えることがある（色覚異常）

(3) 視覚障害のある幼児などの抱える困難さに応じた支援の手立て

幼児は、保護者や先生の行動を模倣してままごと遊びに取り入れたり、他の幼児などの様子を見て模倣してはさみの使い方を学んだり、年上の幼児が遊ぶ様子を見て自分の遊びも工夫したりします。また、ジャングルジムを秘密基地に見立てて、「上の部

屋、下の部屋」などとイメージをもって使うのも、ジャングルジムの大きさや形全体が見えているからです。滑り台で着地できるのも、周囲の風景が見え、着地地点との距離感がつかめているからです。

しかし、視覚障害のある幼児などは、視覚情報が入りにくいため、興味や関心が広がりにくかったり、物の使い方やチョウチョの飛ぶ様子やタンポポの花や葉の形などの自然の美しさや仕組みに気付きにくかったりします。全盲ではなく見えるからといっても、弱視であれば自分から離れている保護者や先生の動きはよく見えないかもしれませんし、小さな動植物の細部まではよく見えないかもしれません。視野欠損であれば、大きな遊具全体を見ることは難しいかもしれませんし、片眼視であれば距離感がつかみにくいかもしれません。

障害のある幼児などが、遊びや生活の中でどのような困難さを感じ、そういった困難さに応じてどのような支援の手立てがあるのかを考え、当該幼児の実態に応じた支援をしていくことが大切です。視覚障害のある幼児などの困難さや困難さに応じた支援の手立てとして以下が考えられます。

①視覚障害のある幼児などの抱える困難さ

- ・障害のある幼児などの周囲の状況を認識する上で触覚や聴覚よりも有効な視覚に障害があるため、周囲の状況を知ることが困難である。そのために、活動が活発に行えず、動作が緩慢になる
- ・特に歩行などの行動に制約が生じる
- ・新しい場面や新しい活動等への適応が遅く、行動を起こすことに恐れや不安が伴うため、用心深く、消極的になりがちである
- ・言葉を聞いても、その言葉が表している実際の事柄や物の様子を知ることが困難であり、知識が偏ることがある
- ・目で見て模倣することが難しいので、新しい行動様式を身に付けることが困難である。また、例えば、着替えを介助してもらったり、絵をかいていても途中で帰る時間になったりするなど、初めから終わりまで全体を通して体験できず、結果、経験不足になることもある

②困難さに応じた支援の手立て

- ・全体像をイメージできるように配慮する

言葉での説明は幼児には伝わりにくいことから、具体的な体験を通して幼児自身が理解できるようにすることが大切です。最初は、動作や活動に時間がかかりますが、ここで時間をかけて自分なりにやってみることで、当該幼児はイメージがもてるようになります。イメージがもてれば、動作や活動の時間は短くなっていきます。

- ・見やすい環境を工夫し、当該幼児が有する視機能を活用させる

近くで見せる、見せたい物と背景のコントラスト（材質のコントラスト含む）を考えた提示、対象物の大きさや色の濃さ、太さ等への配慮等、当該幼児の見えにくさの原因を踏まえた配慮が大切です。例えば、イラストや文字は単純に大きくかけばよいではありません。視野の狭い幼児にとっては、大きく描かれたイラストは逆に全体像が把握しにくい場合もあります。また、イラストの大きさは同じでも、描いている線が太ければ認識できる場合もあります。

- ・環境の変化に対する不安をやわらげる

視覚に障害のある幼児などは、環境を認知するのに、視覚とともに聴覚を多く用います。環境の全体が把握できないと、自分の置かれている立場が分からず、情緒が不安定になってきます。また、大きな音、急激に起こってくるざわめき、騒音などがあると、環境の認知に混乱が生じてきて不安定になる場合もあります。しかし、環境の変化を阻止することはできません。そこで、変化の状況や行事の流れなどを説明して、環境への適応を助けることが大切です。

また、例えば、視野が狭い幼児は、自分と同じ大きさのクマのぬいぐるみ全体を見ることはできず、クマの腹部、手、顔などの各部分を見て、見た物を頭の中で統合してクマのぬいぐるみの全体像を捉えます。このような部分情報からの入力のみで全体像を構成していく情報処理過程では、当該幼児の思考を妨げるような余計な声掛けや介助は避ける必要があります。

- ・音等の活用を工夫する

聴覚や触覚の情報を活用することで、視覚情報の不足を補うことも考えられます。例えば、ボール遊びのボールに鈴を入れて、ボールの所在を分かりやすくしたり、

造形物のように触って確かめられる物については、ざらざらした箇所と滑らかな箇所に分けたりなどの工夫が考えられます。

- ・目と手の活用を促す

視覚を活用できる幼児に対しては、保有する視覚を活用して物を見る楽しさを味わい、積極的に見ようとする態度を育てます。また、生活の中で、手先の操作を伴う遊具や用具の使用などを通して目と手の協応動作を高めるとともに、豊かな視覚的経験を積むようにします。

- ・体全体を使って遊ぶ

行動全体が消極的になり、体全体を使った遊びをすることも少なく、体の使い方にも慣れていない傾向があります。少しずつ、体全体を使っての遊びや運動に積極的に参加させ、経験を積み上げるようにしていくことが大切です。

その際、不安や恐怖感を軽減するため、環境がどうなっているか、遊びの方法、遊具の使い方、相手の人などについて、必要に応じて予めよく知らせておきます。また、激しい運動の場合は、衝突などの防止に万全を期し、他の幼児にも、視覚に障害のある幼児などの活動に十分配慮するよう注意を促します。

- ・遊具や道具の扱いに慣れるようにする

いろいろな遊びの中で多様な遊具を使うことに慣れていない場合が多いので、無理のない範囲で経験を積み重ねて、徐々に各種の遊具や道具を使えるようにします。また、自分で片付ける作業を通して、物の置き場所の位置の認知や、物の種類の数量の感覚なども身に付けられるようにします。

(4) 困難さに応じた支援を活用して園での遊びや生活を展開する

先生の必要な支援の下で、視覚障害のある幼児などが園での遊びや生活を楽しみ、他の幼児との関わりを広げていけるようにすることが大切です。他の幼児との関わりを深め、遊びを展開していく際に大切なことがあります。それは、視覚障害のある幼児などの困難さに応じた支援を、他の幼児との関わりや集団の生活の中で自然に取り入れていくことです。しかし、その支援によって、他の幼児が遊びを楽しめなくなる

ことは避ける必要があります。視覚障害のある幼児などが、クラスの一員として他の幼児と共に遊びや生活を楽しめるようにすることが大切です。

コラム すごろく遊びを通して（5歳児）

～見やすい教材の工夫や聴覚情報等を活用して遊びを楽しむ～

支援のポイント

視覚情報が得にくい幼児が他の幼児と情報を共有し遊びを楽しむためには、聴覚や触覚情報を上手く活用し、物の名前を伝えるときにはその物を触ったり特徴を言葉で伝えるなどしてイメージをもちやすくしたりする必要があります。

他の幼児との関わりにおける先生の思い

他の幼児と視覚情報を共有することが困難なため、遊びの中に聴覚情報等を取り入れ、幼児同士が主体的に遊んでほしい。これまでに、先生がA児に関わる様子を見たり、先生が仲立ちをして聴覚情報等を取り入れて遊んできた経験を生かして、幼児同士で解決できるように、見守ったり助言をしたりしていこう。

すごろく遊びの様子

A児には弱視があります。先生は、クラスの幼児たちがすごろく遊びを楽しんでほしいと思い、いろいろな種類のすごろくを用意しました。しかし、A児には、既製のすごろくは絵や文字が小さく、またカラフルなこともあり、はっきりと絵や文字が見えません。そこで、A児も一緒に楽しめるように、手作りのすごろくを幼児たちと一緒に考えて作ることにしました。

テーブルを囲んでA児と他の幼児が座りました。先生は少し厚めの画用紙と極太のマーカーペンを用意し、「先生が、線を書くね」と進むマスの線をマーカーで書き始めました。幼児たちは、「わぁ、ふと～い!」「このペン、太すぎる」と、興味津々にペン先をじっと見つめながら、先生が書く様子を見ていました。何マスか書くと、「ねえ、ここに止まったら、三つ進めることにしようよ」と幼児が言い始めました。「いいね、ここは四つとかにしようよ」、「でもさ、進んでばかりじゃ、つまらないよ。ねこの鳴きまねをする、ニャーニャーって」、「え、それは簡単すぎるよ」

など、幼児同士が次から次へとマスに書くことを考え始めました。先生は線を書きながら、「簡単なものも少し難しいのも、いろいろあると面白そうだよ」とつぶやくと、A児が「じゃあさ…」と近くに置いてあったフラフープを見て、「フラフープを回すのはどう？」と言いました。「あ、いいね！」「できる！ できる！」「ねえ、ボールを10回キャッチする！」「そんなの簡単！」など、他の幼児と共にアイデアを出し合っています。

先生は、A児がよく見えるように、マスの中に、簡単なねこの絵をかいたり、「3つ すすむ」と太い文字で書いたり、フラフープ回しやボールキャッチでは、その遊具の絵をかいたりして、そのマスに止まったら何をしたらよいかが見て分かるようにしました。

また、サイコロも、手作りにして、出た目が分かるように太く大きくかきました。

その後、すぐろくができあがると、早速、A児は友達と一緒に遊び始めました。A児がサイコロを振ると、自分が考えた「フラフープを回す」のマスに止まりました。A児は、フラフープの絵を見て「あ、ここ、僕が考えた所だ」と嬉しそうにして、フラフープを手に取り、「もう、やっていい？ いくよ」と声を掛けました。周りの幼児は「ここだとぶつかりそうだから、もう少し、そっちに行った方がいいよ」と手を取る姿も見られました。

他の幼児は、園でA児と遊びや生活を共にするうちに、A児には目で見ることが難しいので、言葉掛けをするとよいことを理解しています。先生は、幼児同士で進めている様子を見守ることにしました。

他の幼児と共に遊びや生活を楽しむことができるような支援を考える

視覚障害のある幼児などへは、聴覚、触覚、臭覚等の視覚以外の感覚を活用し、保有している視覚を十分に活用できるようにする支援を考えていきます。

A児のように弱視の場合は、保有している視覚を活用できるように、線を太くしたり、伝えたい情報をシンプルで分かりやすい絵や文字にしたりするなど、見やすくなるように工夫することが大切です。

言葉による援助として、視覚に障害のある幼児などに分かりやすい言葉、イメージが伝わるような言葉を使ったり、声の調子や話す速さなども工夫したりして、明るい、暗い、楽しい、怖いなどのその場の状況や雰囲気を感じとることができるよ

うな言葉遣いなども日頃から意識することが大切です。単に「見えないのだから説明してあげてね」では、言葉によるやり取りが未熟な幼児にとっては伝わりにくいものです。

言葉と併せて、聴覚を活用するため、空間や場所が分かるように集まる場所に音が出る物を用意したり、触覚を活用するため、触れると心地よい物にたくさん触れたりするなど、その幼児なりに実感を伴って言葉と結び付けて理解できるような援助により、継続的に楽しめるようにすることが考えられます。

視覚障害のある幼児などが「遊びたい」「やりたい」といった気持ちをもてるような体験を積み重ねることが重要です。